
The Japanese society on the northern Kuril(Chishima) Islands during its Japanese domination

Yukiko KUROIWA

During the Japanese-Soviet negotiations in 1955-56, the Japanese government began to insist that Etorofu and Kunashiri weren't included in the Kuril Islands, which Japan abandoned under the San Francisco Peace Treaty in 1951. From that time, Japan has been demanding the return of the Northern Territories; Etorofu, Kunashiri, Shikotan and Habomai from the Soviet Union/Russia.

Under the official opinion of the Japanese government, the Kuril(Chishima) Islands include from Shumshu to Urup only. Though Japan doesn't demand return those islands from Russia, they belonged to Japan from 1875 to 1945. In 1875, in exchange for the rights of the island of Sakhalin, Japan got the 18 Kuril Islands by the Treaty of St. Petersburg.

This article is devoted to tracing the rise and fall of Japanese society on the northern Kuril Islands. During the 90 years of Japanese domination, the Japanese government forced the movement of indigenous people of the northern Kuril Islands to Shikotan. After that, there were two trials of Japanese settlement there, the development of the fishery, the Second World War and deportation of Japanese habitants by the Soviet Union.

The historical facts of the northern Kuril Islands, which are deeply connected with the growth of Japan as the new modern state from the end of the 19th century to the end of World War II, give a new point of the view to the arguments of the problem of the Northern Territories.

日本領時代の北千島における日本人社会について

－「北門の鎖鑰」の実像－

黒岩 幸子

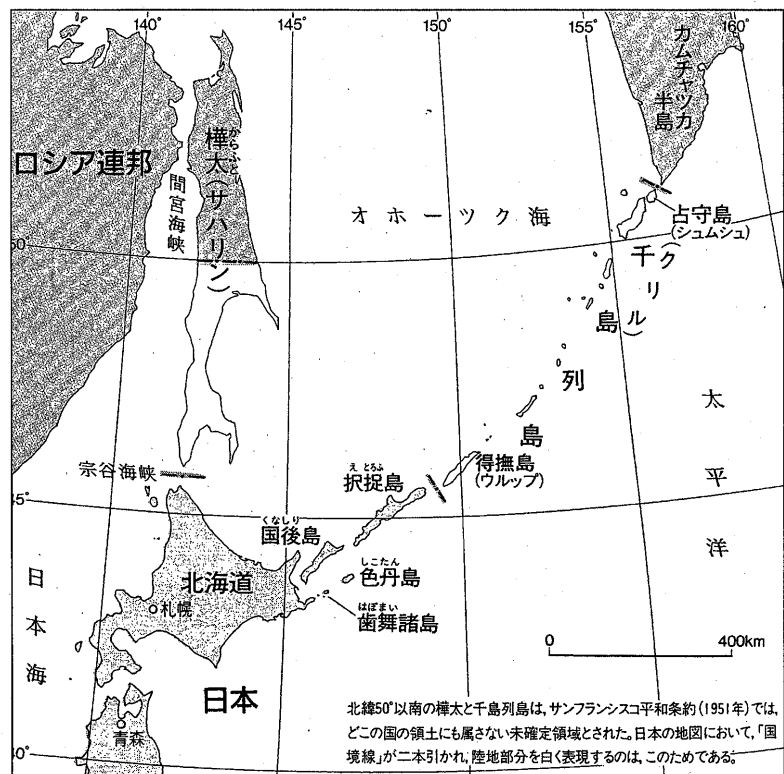
はじめに

1951(昭和26)年のサンフランシスコ平和条約で、日本は樺太・千島を放棄したが、1955-56(昭和30-31)年の日ソ交渉で、その放棄した千島列島に択捉、国後、色丹、歯舞は入らないとの立場を日本政府はとり始めた。色丹・歯舞は北海道の附属島嶼であり、択捉・国後も一度も外国支配を受けたことのない日本固有の領土と主張することで、サンフランシスコ平和条約に抵触することなくソ連に四島の返還を要求したのである。

日本の主張する千島列島の範囲は、北端のシュムシュ(占守)からウルップ(得撫)までとなり、択捉、国後、色丹を指す「南千島」という名称は不適切となったため、これに歯舞諸島を加えた「北方領土」という呼称が定着するに至った。また、サンフランシスコ条約は、日本が放棄した樺太・千島の帰属先を明記していないため、多くの日本の地図はこの地域を白抜きにして、帰属が未確定であることを示すようになった。(地図①)

日本が返還要求する「北方領土」に含まれることなく、地図上の空白地帯と化した千島は、辺境の島々として日本人の関心から抜け落ちてしまったが、1875(明治8)年に樺太千島交換条約が結ばれてから1945(昭和20)年にソ連軍に占領されるまでの90年間、れっきとした日本領であった。特に北千島では、その90年の間に、先住民であった北千島アイヌの強制移住、軍人を中心とする日本人の二回にわたる入植の試み、北洋漁業の基地としての発展があり、第二次世界大戦末期の日ソ戦における最大の戦闘があった。北千島は、紛れもない日本国の「北門の鎖鑰」¹⁾であった。

しかし、領土返還の対象から外され、日本の歴史からも政治からも忘却された日本領時代の北千島に関する研究は少ない。北千島アイヌの強制移住の顛末²⁾、第一次移住を企画した軍人の郡司成忠(1860-1924)や南極探検で知られる白瀬轟(1861-1946)ら個々人の足跡³⁾、第二次移住期のシュムシュで生まれ、終戦まで定住していた別所二郎蔵(1907-1976)による記録⁴⁾などはあるが、包括的に北千島を扱った文献は見当たらない。本稿は、北千島の日本人社会の興亡を通時的にたどりながら、日本領時代の北千島の実像を明らかにするものである。北千島の日本領編入の経緯と移住計画の策定(1)、第一次および第二次移住の顛末(2)(3)、北洋漁業基地の発展(4)、敗戦と北千島住民の



地図①『環境と人間 新編地理A』(高等学校地理歴史科用文部省検定済教科書)、東京書籍、2000年、11頁。

戦後(5)をたどり、結びとして、日本にとって北千島はいかなる意味をもっていたのか、北方領土問題も視座に入れつつ考察する。

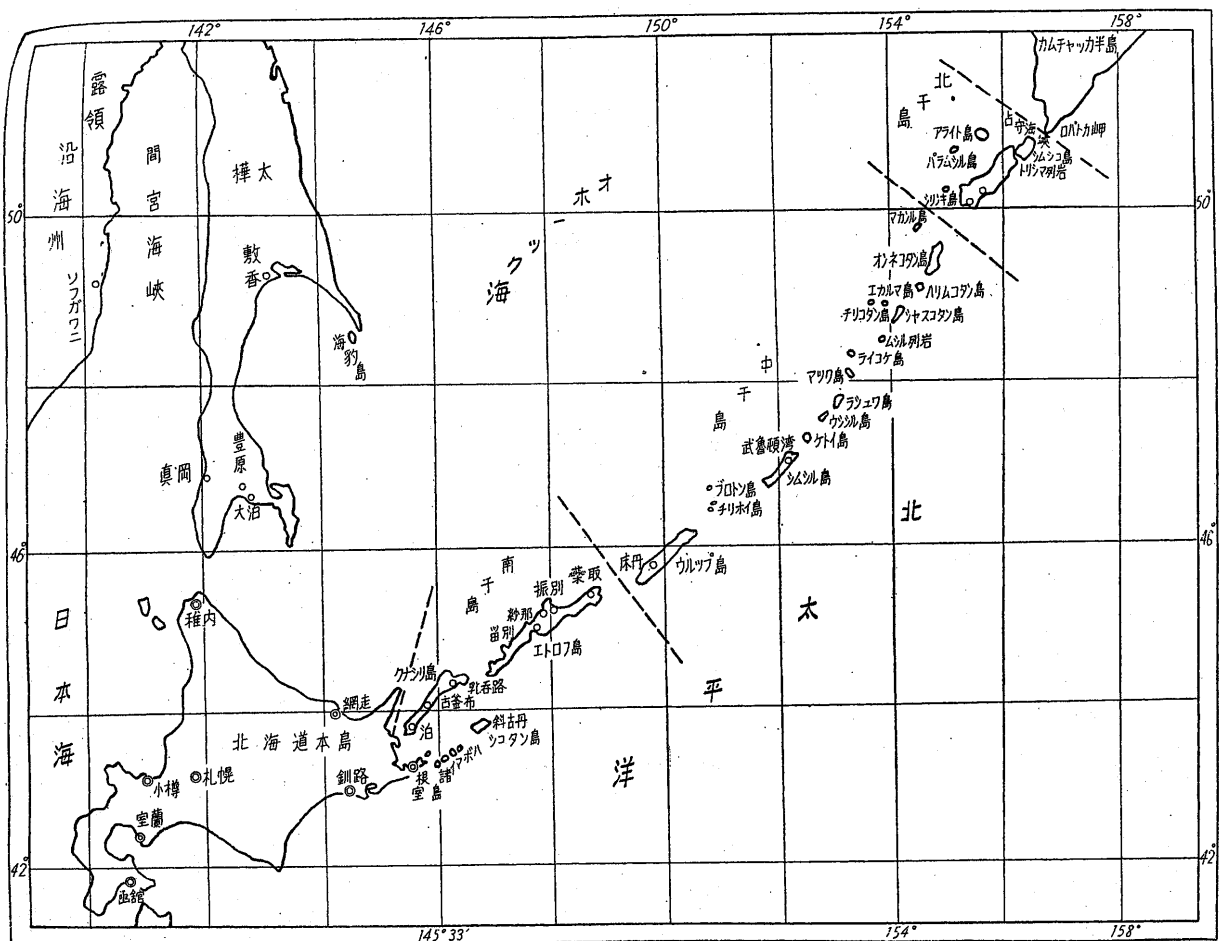
1. 北・中千島の日本領編入と北千島移住計画

1855年2月(安政元年12月)の日魯通好条約によって、日露は初めて国境画定を行い、当時の両国の実勢範囲にもとづいて、千島列島のウルップと択捉の間に国境線を引いた。勢力分布が明確でなかった樺太については、境界を確定せずに日露の雑居地として据え置いた。

しかし、その後樺太では、日露双方が自国領有の既成事実の形成に腐心してトラブルが絶えず、国境画定問題が再浮上した。そこで、20年後の1875(明治8)年に日露は樺太千島交換条約を締結して、樺太全島をロシア領とする代わりに、ロシア領であったウルップからシュムシュまでを日本領に編入することで合意した。

千島全島を領有することになった日本は、国後・択捉を南千島、ウルップからマカシル(磨勘留)までを中千島あるいは中部千島、PARAMSIL(幌筵)からシュムシュまでを北千島と呼ぶようになった。(地図②)しかし、日本が新たに手に入れた北・中千島を自国の産業構造に組み入れるまでには、かなりの年月を要した。千島列島の研究者であるジョン・ステファンは、次のように述べる。

余計な贈物を抱え込んでいるのに気づいた人間のように、日本は初め、遠くカムチャッカまで伸びた岩だらけの連なりを、どうしたらよいのかわからなかった。厳しい気候のせいで強められた無関心が、



地図② 高倉新一郎『千島概史』(南方同胞援護会、1960年)より。

投資を妨げた。日本が列島の経済的潜在力を評価し始めるまでに、ほぼ20年が経過した⁵⁾。

この20年間に日本政府が北千島で行った唯一の顕著な事業は、北千島アイヌの強制移住である。古代から千島列島にはアイヌ民族などの先住民が居住し、小規模な漁業や交易を営みながら、北はカムチャッカ、南は北海道との繋がりを通して、日本とユーラシア大陸の間の物流を可能にしていた。

カムチャッカ半島から指呼の距離にある北千島に居住する先住民は、19世紀に進出してきたロシアの影響を強く受け、日本領に編入された時にはすでに、大半が敬虔なロシア正教徒となってロシア語を話し、頻繁にカムチャッカに渡航していた。それまで和人がほとんど足を踏み入れたこともない遠隔地の実態を危惧した明治政府は、1884(明治17)年に約100名の北千島アイヌを、当時は無人島となっていた色丹に移住させた。移住後の北千島アイヌは、気候の変化や農耕・定住生活にまったく適応できず、5年半で約半数が死亡、生き残った者も和人との同化に曝されて、日本社会の底辺へと溶解して歴史から姿を消していった⁶⁾。

先住民の強制移住が完了すると、ウルップ以北は空島になり、この海域はラッコ猟に励む外国の密猟船に荒らされるままとなった。このような事態を見かねて、明治天皇(1852-1912)が侍従の片岡利和に千島巡視を命じたのは1891(明治24)年のことである。片岡は同年10月に択捉に渡ったが、旬季が遅れて北上できずにそこで越冬し、翌年5月からウルップ以北を巡見し、7、8月にシムシユ、パラムシルを調査して帰航した。

当時の皇室は、北海道に御料地、御料林、御料牧場を設定しつつ北海道開拓に意を注いでいたこともあり⁷⁾、片岡の千島巡視は大いに世の注目を集めることとなった。かねてより北門社を組織し、北進論を唱えて樺太の重要性を喧伝してきた漢学者で探検家の岡本監輔(1839-1904)は、片岡の千島視察に刺激されて、千島義会を設立した。結成時には、密猟の場と化した無防備な「皇国の北海」を憂える次のような檄が飛んだ。

ロシア人は実に千島より寒きカムチャッカ、樺太を拓けり。日本民族を以て誇称する皇国人にして、豈独り千島に居住し難きの理あらんや。…千島に渡航し霧霧を冒し沍寒を凌ぎ、一片勇往の精神を祖宗神明に誓いて、死に至るまで拓地殖産に従事し以て国体を保し、国防を全うし、国利を興さん…⁸⁾

ロシア人がさらに北を開拓しているのに、皇国日本人に北千島開発ができぬはずがないと、国家意識と愛国心に目覚めた明治日本の高揚感に満ちた千島義会であったが、結果は失敗であった。1892(明治25)年8月、岡本ら十数名は択捉に上陸したが、季節に遅れて北上の機を逸し、資金調達も期待通りにはならず、択捉南端で若干の漁業を試みただけで、わずか一年後には帰航した。現在、日本政府が千島列島と名づける島々にはたどり着けぬままに、千島義会は解散となったのである。

2. 第一次北千島移住

岡本らの意志を継いだのは、予備海軍大尉の郡司成忠を中心とする報効義会である。新興近代国家として軍備増強に励み、帝国の版図拡大を目指す戦争に突入する直前の皇国軍人は、意気軒昂である。

千島群島は我国北門の鎖鑰にして、この警戒寸時も忽せにすべからざるは、識者を待たずして明らかなり、然るに義に勇を以って誇れる皇国人にして、従来千島を開拓する挙なかりしは、豈沍寒僻遠を恐るるの故に由るに非ずや。…千島極北占守島に移住し、其の地の帝国版図たるの実を挙げん事を望む⁹⁾。

1893(明治26)年3月、明治天皇より御内帑金を下賜された郡司ら予備水兵50余名は、5隻のボートに分

乗して官民の歓呼の中を隅田川から北千島へ出発した。東京からシムシユ島まで2500キロを、無蓋のボートで漕いで行くという暴挙であった。すぐに東北沖の暴風でボート一隻と大型船を失い、同士18名の死者が出た。郡司らは、偶然通りかかった軍艦磐城に救助されて函館に入港した。事の無謀に気づいた者は、ここで脱会、帰航したが、残りの一行は漁業家の船に便乗して択捉に渡った。さらに中千島のシャスコタン(捨子古丹)へ硫黄採掘に向かう船に便乗すると、9名はこのシャスコタンに残留し、残り9名が再び来合わせた軍艦磐城に乗せてもらい、8月末にシムシユに上陸した。隅田川出航から5ヶ月を経てようやく到着した目的地であったが、その厳しい自然を目の当たりにすると、二名はまもなく訪れた軍艦金剛で帰還してしまった。また、ロシア正教会の信徒で、北千島アイヌを色丹から帰還させることを望んでいた和田平八は、調査のために単独でパラムシルに渡ったため、シムシユに残ったのは、郡司ら6名のみであった。彼らは、北千島アイヌの穴居跡を物置小屋にし、自分たちも半ば穴居の掘立小屋に暮らしながら、和人として初めて日本最北端で越年に成功した。

翌1894(明治27)年5月、パラムシルに渡った郡司らは、同年3月までの日記を傍らに腐乱死体となっている和田を発見し、6月に来航した軍艦磐城は、シャスコタンに残留した9名の白骨体を収容した。みな、栄養失調や水腫病で亡くなったと思われる。

時は日清戦争の勃発直前であり、寄港した軍艦を通して郡司らは出征を促された。そこで、シムシユには白瀬轟中尉のみが残留し、他5名は新たな予備役隊員と交替して帰航していった。

2年目の冬を無事に越年した白瀬ら6名だが、春から全員が水腫病に倒れ、4、5月に隊員三名が相次いで死亡した。生き残った3名も衰弱しきって、遺体と共に臥している凄惨な状況が、当時の白瀬の日記に認められている。

…三名の病褥者三死者と同居するの惨状に至れり。…食品愈よ尽きたるを以て、無惨ながら飼犬熊(牡犬の名)を銃殺して、轟等三名の露命を繋ぐことを得たり。5月24日、轟と関とにて(葛原は神経症にて病臥中) …三死者の死屍を埋葬せり。然るに死屍の腐敗糜爛せし為め、臭気紛々たるのみならず、肉片処々に落ち散り且つ重量にして二人力不足…漸く三時間にして埋葬を了するに至れり¹⁰⁾。

1895(明治28)年9月、生き残った白瀬ら三名は、択捉に収容されて、惨澹たる結果としての第一次移住が終わった¹¹⁾。

3. 北千島第二次移住

日清戦争が終わった1896(明治29)年、郡司は、新たに募った報效義会の会員および家族56名を引き連れて、再びシムシユに上陸した。この第二次移住では、片岡湾(モヨロップ)に本部を置き、開発、調査にあたるほか、家畜を飼い、菜園を作り、缶詰工場や小学校まで開いて永住に挑んだ。しかし、11月から5月までの7ヶ月間におよぶ積雪、執拗な濃霧の襲来、単調かつ厳しい気候による圧迫感、およそ日本人には馴染めぬものであった。厳冬好晴の朝にはカムチャッカの寺院の鐘声が聞こえ、「ロシア風の被服、日用品は不分明なルートを通じて片岡の部落に散見されるようになり…、そして、諸感情の行き着くところは一種の外国観であった」。「茶、砂糖、タバコは若干ロシア品が移入されている」¹²⁾。ロシアとの接触を断つためにアイヌを強制移住させた日本人も、やはりロシアとの交流なくしては生活できなかつた。

所期の目的であった密猟の監視も、覚束なかつた。ラッコ猟に励んで、密猟の王者と呼ばれた英国人のスノーは、郡司との邂逅を次のように記録している。

シムシユ島に留まった郡司は精力的な働き手であった。…しかし彼らの事業はみじめな状態にあっ

た。…おびただしい数のタラがこの島の周辺にいたにもかかわらず、彼らはこのタラの魚場さえ知らなかった。郡司は、魚がとれないで、食料に困っていると語った。私は、またたく間に一隻分のタラのとれる場所を教えた¹³⁾。

密猟の王者に魚場を教えてもらい、糊口を凌ぐという有り様であった。

1901(明治34)年3月、第15回帝国議会衆議院に千島開発に関する建議案が提出された。提案者の一人松岡長康は、建議の主意を次のように語った。

此の千島は…重なるものは国後、択捉、占守島なり 此の三個所には多少の移住者も有るか其の他はほとんど無人島の如きありさまなり 然るに千島群島は実に我国北門の鎖鑰にして露国、北米等に接し樺太と交換以来国防上注意せざるへからざる所なり …殖産上多額の産物を出すこと殊に漁業に至りては尤も多し …外国密猟船の為に濫獲せられし獵虎・臘肭臍らっこ おっとせいの如きはほとんど其の跡を絶つに至れり¹⁴⁾

明治半ばの千島列島には、シムシユ、択捉、国後の三島にわずかな移住者が暮らすだけで、外国船による密猟と乱獲は野放しである。樺太の領有も断念せざるを得なかった日本の国力では、北海道の開発がやっとで、とても千島全島の開発には手が回らなかったのが実状であろう。建議案委員会に出席した政府委員の白仁武(内務省書記官)は、大筋で松岡の指摘を認め、次のように答弁した。

北海道の事業はある時は力を大に函館根室の方に尽くし或る時代は縮小したることあり 又或る長官の時代に於て本島に接近したる部分のみに専ら力を尽くしたることあり 彼の広き所を一時に着手することは不経済にして且善良の功を奏せず¹⁵⁾

千島列島の長さは、鹿児島・仙台間に、総面積は岐阜県に等しく、国後、ウルップ、パラムシルは沖繩本島よりも大きい。開発は思うように進まなかった。しかし、1867(慶応3)年にアメリカがロシアからアラスカとアリューシャン列島を購入したために、シムシユの位置は、ロシアと隣接するばかりでなく、北海道よりもアメリカに近くなっていた。また、経済において千島は、水産・鉱物資源の宝庫であった。

松岡は、明治天皇侍従の片岡利和が千島巡視の後に提案した内容に重なる、千島開発の八項目を提案した。

汽船航海を開くこと 築港になすこと 灯台を設くること 色丹土人を占守に移すこと 軍艦をして巡航せしむること 島司を置くこと 測候所を設くること 屯海兵を設置すること¹⁶⁾

帝国議会における小さな委員会で、この建議は異議なしとして通決されたが、ほとんど実現されなかった。屯田兵とならぶ屯海兵はアイデアだけに終わり、和人では適応できぬ千島最北端に、色丹土人(北千島アイヌ)を逆戻りさせて、千島経営の糧にしようとの目論見も流れた。

このような帝国議会での審議をよそに、郡司ら報效義会のメンバーは、シムシユの片岡地区を中心に、かろうじて安定した生活圏を形成しつつあった。1897(明治30)年には、水腫病などでまたしても十名の死者を出しているが、1903(明治36)年には、漁業に携わる海上部員約70名、陸の生活を支える陸上部員約90名、計160名が暮らすようになった。

皇国日本の精神主義と過酷な自然の組み合わせの中で生まれた、日本の歴史の中でもっともユニークな共同体の一つと思われる郡司ら報效義会の試みは、あっけない終焉を迎えた。日露戦争の勃発であ

る。

1904(明治37)年6月に開戦を知った郡司は、帝国軍人として、「変に応じて自ら敵と戦う場合におくれをとってはならない」と¹⁷⁾、即座に19名の会員と共に敵地カムチャッカに乗り込んだ。「この地は日本が占領した。この額に触れるものは誰であれ射殺される」とブローケンなロシア語で書いた標柱を建ててはみたものの、郡司ら数名はすぐにロシア軍に拘束され、捕虜としてペトロパヴロフスクに収容された。

戦後、ポーツマス条約が締結されると、1905(明治38)年12月に郡司らはウラジオストク経由で無事に日本に帰国したが、二度と千島に戻ることはなかった。リーダーを失った報効義会は、無償で貸下げを受けていたシュムシュと他二島の期限が切れていたこともあり、自然解体でほとんどが内地に帰還した¹⁸⁾。日本最北端の国防、殖産を目指した報効義会の歴史は、多くの犠牲者を出して幕を下ろした。推定約50柱の天皇の赤子たちは、墓参に訪れる者もないまま、今なお空白の北千島に眠り続ける。

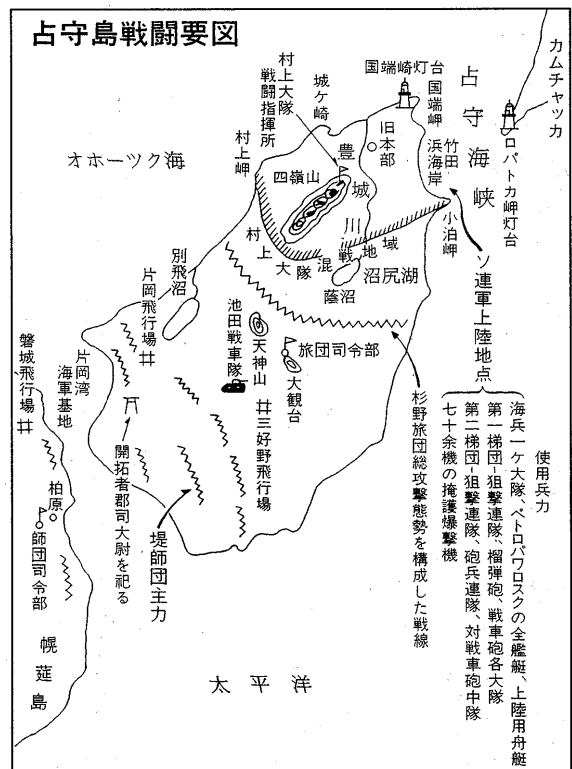
4. 北洋水産基地としての発展

報効義会の夢が潰えた後も、北千島は空島になったわけではない。そこには、北洋漁業を中心とする、より現実的な産業構造とそれとともなう生活圏が形成されていった。

日露戦争後のポーツマス講和条約により、「露西亜国ハ日本海、『オホーツク』海及『ベーリング』海ニ瀕スル露西亜国領地ノ沿岸ニ於ケル漁業権ヲ日本国民ニ許与セムカ為日本国ト協定ヲナスヘキコトヲ約ス」¹⁹⁾ ことになり、この海域で、日本の新興事業家や日魯漁業等の大会社が本格的な北洋開発に乗り出した。サケマス、タラ、カニ漁が盛んになり、それを加工する缶詰工場が、カムチャッカや日露戦争で獲得した南樺太に進出する。カムチャッカ半島の両岸で漁業権を得た日本は、ロシア領海で漁をし、ロシア領に工場を建てて加工し、漁師や女工を送りこんだ。

しかし、1917(大正6)年のロシア革命後にボリシェヴィキ政権が確立すると、野放しだった日本のロシア領内での漁業活動に制約が加えられるようになり、日本の北洋水産の基地は、カムチャッカから北千島に移っていく。当時、中千島は農林省の管理²⁰⁾、北千島と南千島は北海道庁(根室支庁)の管理であった。大正末から昭和初期にあたる1920年代には、日魯漁業のほか、北洋漁業、大北漁業、千島漁業、北千島水産などの漁業会社、また数多くの個人経営者が北洋漁業に参入した。次第に北千島は、函館をゲートウェイにして北海道南部や本州と結ばれるようになり、昭和期には北千島の漁業経営者は圧倒的に函館出身者で占められた。1937(昭和12)年の千島航路には、道庁命令航路として函館-北千島線と根室-占守線があった。

拠点が置かれたシュムシュとパラムシルには、再び日本人の特異な社会が活性化した。漁期には多数の季節労働者が渡り、ピーク時には2万人から3万人が両島に居住して活況を呈した。その多くが、東北地方からの出稼ぎ者であった。報効義会以後、北千島の定住者は、残留した別所次郎蔵一家と漁業開発の将来性に着目して1933(昭和8)年から定住した青森県人小宮山利三郎の二家族のみであったが、1930年代後半からは、



地図③ 池田誠編「北千島占守島の五十年」(国書刊行会、1997年)より。

北洋漁業の発展により移住者も増え、パラムシル、シユムシュの越冬者は200名を越えるようになった。定住者の数は最後まで百数十名に過ぎなかったが、小宮山氏が中心になり、1937(昭和12)年にシユムシュに北千島移住協同組合が設立され、1944(昭和19)年には北千島定住組合と改称されて終戦まで活動を続けた。

1936(昭和11)年春から1943(昭和18)年秋までの7年間、パラムシル島の二カ所に函館郵便局の出張所(1937年度から分室と改称)が設置され、6名の職員が常駐した。その後、軍事郵便所に引き継がれた両出張所は、1936(昭和11)年度に、普通郵便約5万通、小包郵便約2500個を扱ったほか、50件の郵便貯金新規加入を受け付けている²¹⁾。

5. 敗戦と北千島住民の戦後

シユムシュ島は、日本によるポツダム宣言受諾後の1945(昭和20)年8月18日から23日にかけて、日ソ間の激しい戦闘の舞台となった。ソ満国境を越えて怒濤のように南下したソ連軍が、瞬く間に日本軍を駆逐したのに対し、カムチャッカからシユムシュに上陸したソ連軍は、日本軍の予期せぬ激しい抵抗に遭った。この戦闘で、ソ連軍に1,567名、日本軍に1,018名の死傷者が出ている。第二次世界大戦末期の短期間の日ソ戦におけるもっとも激しい戦闘であり、ソ連軍の損害が日本軍を上回った唯一のケースであった²²⁾。(地図③)

ソ連軍は8月末にウルップまで制圧し、サハリンから投入された別軍によって9月5日までに択捉から歯舞も占領された。千島に駐留していた日本軍の多くが武装解除の後にシベリアに抑留され、残留した民間人も1948(昭和23)年までにすべて強制退去させられた。南千島に定住していた漁業者を中心とする約17000人の半数近くは、引き揚げ後も根室近辺に居住して、現在なお北方領土返還運動の担い手となっているが、北千島のわずかな定住者の戦後は知られることもなく過ぎた。

1963(昭和38)年に北海道庁は、終戦まで引き続き6ヶ月を越えて北千島に生活の本拠を有したことのある者を対象に、生活実態調査を行った。それによると、北千島元居住者の在島時総数は、82世帯109人で、これら全世帯が漁業兼農業で生計を立てていた。引き揚げ状況は、終戦前に徴兵・徴用・疎開した者16名、終戦直後に漁業会社の船や軍用船で脱出した者75名、終戦後も残留して、その後追放された者18名である。この18名は南千島の住民と共に、1947、1948(昭和22、23)年に樺太経由で函館に引き揚げており、婦女子も含まれる。

北海道庁が調査時に把握できたのは、全82世帯のうちの68世帯、調査に応じたのは54世帯である。引き揚げ後も、漁業、農業など第一次産業従事者世帯が全体の6割を占め、低所得階層(年間収入30万円未満)が22世帯(40.8%)もある。帰島希望者は54世帯中52世帯で、希望しない2世帯も老齢のため「すぐには帰らない」との解答である。元北千島居住者の出身地は、青森が最も多く51名(46.8%)、次いで千葉県28名で、北海道は12名(11%)に過ぎず、北海道出身者が圧倒的に多い南千島元住民とは異なる²³⁾。

1963(昭和38)年になお、ほとんどの北千島元居住者が帰島を希望していたのは、当時まだ北千島への帰還の可能性が信じられていたことを意味するのであろうか。北千島に望郷の念を抱きつつも、それを表明する場もなく、この109名の寿命も今や尽きる頃と推定される。

むすび

90年の北千島日本領時代は、後発の近代国家である日本が、富国強兵政策により列強との争いに乗り出し、戦争を重ねるたびに帝国の領土を拡大し、そして第二次世界大戦ですべてを失うという、明治から昭和の激動期に重なっている。明治期に新たに獲得された領土であったこと、また、大国ロシアと近接した国境地帯となったことが、北千島に特殊な運命をもたらした。

長い鎖国を経た後の明治期に、日本人は、諸外国との対比における自国を見出し、初めて国民意識、

国家意識を持ち始めた。従来のアジアの緩やかな冊封システムから、明確な境界と領土で区分される近代国家のシステムへの移行があった。当然、そこでは国境意識が先鋭化し、特にアジア・極東地域で競合していたロシアとの国境地帯は緊張したものとなった。明治政府が北千島で最初に行った事業が、先住民の強制移住であったことは象徴的である。前近代的な海獣猟や交易を生業としていた100名足らずの先住民の存在すら、国境付近では危険視された。

太古より形成された先住民の文化圏を暴力的に分断しつつ、近代国家により境界が引かれる事例は、世界史上珍しいものではないが、北千島においては、強制退去による国境地帯の完全な無人化という極端な方法がとられた。

先住民に代わって北千島に登場した日本人グループが、日清、日露戦争期に重なっていることも時代を象徴している。この二つの戦争によって、日本は新たな領土と植民地を獲得し、ますます国境意識を強めていった。多くの犠牲者を出した、愚行とも見える郡司らの二度の移住計画は、当時の国防、殖産という国是に忠実に従ったものであった。日本では知る人も少ない報効義会について、ロシアの歴史教育用参考書『サハリン州の歴史』が記載している。そこでは、「日本のクリル列島移住者がカムチャッカ占領を試みる」という見出しで、日露開戦を知った郡司ら義勇兵19名がカムチャッカに上陸したことが「日本史上初のロシア領土への侵入」として説明されている²⁴⁾。ロシア側もまた、国境に対しては過敏であったし、現在も同様である。

大正期以降の北千島は、北洋漁業の基地として発展する。日露/日ソ間のサケ・マス漁業をめぐる確執は今日に至るものである。出稼ぎの労働力に頼りながら、漁労および内地で高値のつく水産物の加工に特化して、北千島は南千島と同じく、典型的な内国植民地の様相を帯びていく。

戦後、千島全島を占領したソ連は、積極的にソ連人を入植させたうえで、日本人はすべて退去させた。現在、北千島には、パラムシルに水産業で成り立つセヴェロクリスク²⁵⁾という町があるが、他にはわずかな軍関係者が駐留しているだけで、北・中千島には日本領有時代と同じく無人島が多い。なお、ロシアでは、日本政府が主張する千島列島と北方領土を合わせてクリル列島と呼び、地理的にはシムシュから国後までの大クリルと色丹・歯舞の小クリルという二つの平行した群島から構成されると見なされている。行政区分ではサハリン州に含まれ、シムシュからケトイ(計吐夷)までが北クリル地区、シムシル(新知)から択捉までがクリル地区、国後以南が南クリル地区に区分されている。

北・中千島が日本領に編入されたのは、日魯通好条約で南千島が日本領と確定したわずか20年後であり、それから敗戦まで日本の北門の鎖鑰として、歴史の変転にさらされてきた。日本政府は、この島々を返還要求の対象からはずしたが、南千島同様に、北・中千島も、カイロ宣言により日本が「駆逐セラルベシ」と規程された「暴力及貪慾ニ依リ日本国ガ略取シタル」²⁶⁾ 地域ではない。日露間の平和裏の話し合いによって、日本領と合意されたものである。

沖縄および千島の返還運動に携わっていた南方同胞援護会が、啓発を目的として1960(昭和35)年に出版した『千島概史』の序で、著者の高倉新一郎氏は次のように訴える。

…千島は我が祖先が早くから発見し、経営し、その結果日本領土として認められたものであって、決して暴力をもって他国から奪ったものでない…。願わくば多くの人の理解によって、千島が我が国に還される日の一日も早からんことを²⁷⁾。

高倉氏のいう千島は、北・中・南千島全島を指し、1960年代において日本にはまだ、千島全島返還を訴える声が強かったことを示している。1963(昭和38)年に、千島引揚者の団体である「千島歯舞諸島居住者連盟」が設立された。名称が示すとおり、「千島」はシムシュから色丹までを指しており、この時点でも千島全島が意識されていたのである。ただし、南千島からの引揚者の多くが戦後も北海道東部に

居住して、現在に至るまで北方領土返還運動に積極的に関わっているのに対し、北千島の元島民の大半は、本州から各地に散ってしまい、彼らの望郷の声が返還運動なので聞こえてくることはなかった。

日ロ両国にとっての辺境として白抜きの地図で北海を漂う北千島は、近代日本史の重要な一頁を担っているだけでなく、自然保護、漁業、先住民、国境画定など、数々の焦眉の問題を提示しているのではなからうか。

註

- 1)1834(天保5)年、熱心な攘夷論者であった水戸藩主徳川斉昭が、日本北辺の国防の重要性を説き、蝦夷地の拝領を老中に建議した際に使用した言葉で、鎖鑰とは錠と鍵を意味し、転じて敵の侵入を防ぐ要地を指す。(菊池勇夫『アイヌ民族と日本人 東アジアの中の蝦夷地』朝日選書、1994年、275頁)。
- 2)小坂洋右『流亡 日露に追われた北千島アイヌ』道新選書、1992年。
- 3) 廣瀬彦太『郡司成忠』鱒書房、1939年。能戸英三『郡司草-北千島の実情を語る』北千島資料刊行会、1956年。白瀬京子『雪原へゆく わたしの白瀬』秋田書房、1986年。
- 4) 別所二郎蔵『わが北千島記』講談社、1977年。別所夫二編『別所二郎蔵随想録 回想の北千島』北海道出版企画センター、1999年。
- 5)John J.Stephan “*The Kuril Islands: Russo - Japanese Frontier in the Pacific*”, Clarendon Press, Oxford, 1974, p.96.
- 6)北千島アイヌは、カムチャッカ半島に居住していたカムチャダールとの婚姻も多く、クリル人とも呼ばれていた。色丹移住の悲惨な末路については、小坂『流亡』に詳しい。
- 7)1886年、開拓使新冠(ニイカップ)牧馬場を御料牧場に、1888年、川上開拓のため川上御料地設定、1889年、北海道内国有林約200万町歩を御料林に編入。(高倉新一郎『千島概史』南方同胞援護会、1960年、129頁)。
- 8)1892年1月26日、北海道毎日新聞「千島義会の檄文」(再録：桐原光明『関熊太郎伝』暁印書館、1996年、88、89頁)。
- 9)郡司成忠「移住趣意書」(別所夫二、前掲書、3頁)。
- 10)高倉新一郎監修『根室市史』上巻、北海道根室市、1968年、478頁。
- 11)1912(明治45)年、白瀬京子は日本人として初めて南極大陸探検を行っている。
- 12)別所夫二、前掲書、49、106頁。
- 13)J.H.スノー『千島列島黎明記』馬場脩・大久保義昭訳、講談社学術文庫、1980年、36-37頁。1868年に鉄道技術者として来日したスノーは、1873年から約20年間千島水域でラッコなどの密漁を行った。1893年6月に郡司に会ったと書いているが、郡司がシムシムに上陸したのは同年8月であるから、スノーの記憶違いであろう。
- 14)第15回帝国議会衆議院千島開発に関する建議案委員会会議録/1901年3月22日分(北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会『アイヌ史』資料編3近現代資料(1)、北海道ウタリ協会、1990年、126-127頁)。
- 15)同上、127頁。
- 16)同上、128頁。
- 17)高倉、『根室市史』上巻、489頁。
- 18)唯一残った別所次郎蔵一家も、ソ連軍侵攻後の1947(昭和22)年10月に根室に引き揚げを余儀なくされた。
- 19)日露講和条約(ポーツマス条約)第11条(末澤昌二、茂田宏、川端一郎編著『日ソ基本文書・資料集(改訂版)』RPプリンティング、2003年、31頁)。
- 20)外国密猟船の乱獲でオットセイが全滅の危機に瀕したため、1911年に日英米露間でオットセイ保護

条約が締結された。この条約で1916年に中部千島が繁殖地に指定され、同時に農林省の管轄に移されて禁猟区になった。

21)坂本木八郎『厳寒の地 北千島の郵便局物語』1998年、34頁。

22)ボリス・スラヴィンスキー『千島占領 1945年夏』加藤幸廣訳、共同通信社、1993年、120-121頁。
ソ連軍の死者516人、降伏によりソ連軍の捕虜となった日本軍将兵はシムシユ島で1万2000人を越えた。

23)北海道『北千島居住者生活実態調査書』1963年、1-4、8、15、19、32頁。

24)М.С.Высоков и др.,《История Сахалинской Области》, 1995, Южно-Сахалинск, с.54.

25)セヴェロクリスク市(Северо-Курильск)。ソ連軍が占領した翌年の1946年にパラムシル島につくられた港町で、漁業船団の基地となっている。人口3800人(1998年調査)。

26)1943年11月27日カイロ宣言 (日本外務省・ロシア連邦外務省『日露間領土問題の歴史に関する共同作成資料集』1992年、17頁)。

27)高倉、『千島概史』、2、3頁。